

二百年前の  
ロシア作家  
トルストイ作  
『イアンの馬鹿』

## イアンの国～ロシア

この話には、畑を耕して妹と両親を養うイアンと、兵隊になった長男、商人になった次男の三兄弟が登場します。

兄たちはそれぞれ強い軍隊の国、大商人の国の王様になりますが、他の強国や商人との争いに敗れ、滅ぼされてしまいます。

失うものが無かったイワンは争わず、逃げ戻った兄たちと、家族みんなで平和に暮らし続けます。

「ありのままの自分を受容れ、欲張らずに働いたイアンが幸せになった。ロシアはイアンの国だ」、そう読み取れました。

☆

明治時代、ロシアで革命があり、王様が追放され、労働者=イアンの国に変わり、周りの国々と「ソビエト連邦」と言う大家族を作ります。

ところがイアンの兄たちのように、自分は働かず、国民に戦わせ、働かせて、王様だけがぜいたくをする状態に変わって行きます。その状態が長続きする訳もなく、結局、ソビエトは滅んで、もとの小さな国に別れました。

★

ロシアとベラルーシは兄として、弟ウクライナを、元の家族に戻そうとしている、良い事をしているだけだと言います。

でも兄の勝手な言い分で、イアンの平和な暮らしが壊されています。家族なら、良い事ならどうして話し合わないのでしょうか。

ドイツは、第二次世界大戦後、力づくで他の国を変えない事を誓いました。そのドイツがロシアの侵攻に抗議し、国会でウクライナの戦い

を支援すると決めました。

ドイツは敗戦後、国を二つに分割され、親子きょうだい離れ離れになった経験があり、ソビエトが壊れて一つに戻った国だからかも知れません。

☆☆

わたしはこう考えます。

子どもの頃、自分の事だけしか考えず、住んで居る世界について学ばなかった人、好きな事だけを学んだ人は、王様の間違いに気づかず、利用されてしまう、かも知れないと。

今、学校に行けない子たちが居ます。学校という社会のしくみに合わせる事が苦しい子たちです。

今の日本は、しっかり学んだ人たちみんなが協力して作った社会ですから、苦しければ学校に行かなくても良い、そう言っています。

でも、学ばなくて良いとは言っていない。

わたしが心配なのは、好きな時に起き、好きな時に食べ、好きな事だけして眠る毎日を認める事が将来、戦争する子どもを育てているかも知れない事です。

日本は、学校以外でも学べる国です。

学ばない人と、思い込みで学ぶ人たちが作る国のしくみは、争いの中で滅んでしまいます。

そうならないまでも、欲張りの王様に利用されても、利用されている事にも気付かない、気付いてもあきらめてしまう。

そうなって欲しくないのです。

